

幼稚園実習を通して学生の自己成長を促すルーブリックの開発と活用

—実習への意識向上とスキルアップに着目して—

Development and Utilization of a Rubric to Encourage Students' Self-growth through Kindergarten Practice: Focus on Raising Awareness and Skills for Practical Training

間井谷 容代*・石原 由貴子・高岡 昌子・岡村 季光

Hiroyo MAITANI*, Yukiko ISHIHARA,
Masako TAKAOKA and Toshimitsu OKAMURA

要旨

これまで、保育現場（幼稚園・認定こども園等のことであり、以下を「保育現場」と示す）での教育は、一人一人に寄り添うこと、「遊び=学び」として、環境を通して保育を進めていくことが基本とされている旨、幼稚園教育要領に記載されている。その基本の理念に基づき日々計画を立て、目指す子ども像に向けて実践に取り組まれている。まだ生まれて間もない小さな子どもに「養護+教育」に取り組む保育現場での実習に対して、「楽しい」だけの実習として終える学生の状況に疑念を持つ。現在の幼児教育実習の展開が、幼稚園教諭・保育教諭等の離職率の高い理由の一つに繋がるのではなかろうかと感じる場所である。この現状を打開するために、学生の幼児教育に対する意識改革に努める必要性を強く感じる。そのために学生の現在の意識状況を知り、更なる学びに繋げるための自己評価としてルーブリック評価を活用する。ここでは、実習前・実習中・実習後の学生の学びの意識について確認をしていく。その中で意識の変容に期待をしたい。そして学生の質の向上としてアクティブラーニングを取り入れた授業の遂行の仕方を振り返り、授業の再構成を図る。これからの社会に貢献する学生が質の高い保育者像を一層意識して学びを深めていくことは、基礎的な部分から保育の質の向上と幼児教育に対する意識改革に繋がっていくことであろう。

キーワード：幼稚園教育実習、ルーブリック評価、アクティブラーニング、保育現場、意識改革

I. 問題と所在

昨今、保育現場では公私立関係なく、実習に対して、温かく実習生を迎え入れ優しく指導をしてくださる園が増加している。保育者養成校としてはその対応に感謝するばかりであるが、これは保育者（幼稚園教諭・保育士・保育教諭のことであり、以下を「保育者」と示す）不足による就職募集が背景にあるのではないかと考える。実習訪問の際には、必ず訪問する教員に保育者希望の状況を尋ねられる園が多くなってきている。以前までは待機児童の話が話題になることが多くあったが、近頃では産休・離職という異動の話題が多く、産休補助の先生を探している話もよく聞くようになった。離職については國田・小阪・西菜が、職場環境を問題視している¹⁾。異動の問題については、保育現場のチーム体制の問題であり、働く保育者への支援体制であろうと、筆者らは感じる所だ。

2017年より幼稚園・認定こども園・保育所にカリキュラムマネジメントが導入され、保育の質の向上と改善が求められている²⁻⁴⁾。これは離職等異動の問題に向けての解決に繋がる糸口ではないかと思巡らすところだ。現在、保育現場は何よりも、保育者不足の改善に向けて働きかける必要性に迫られている。実習訪問の際にその緊迫感が伝わる。

保育者養成校として、「命を預かる現場」を意識し、演習授業等を進めている。しかし、学生にとっては実習に臨む保育現場は、むしろ「楽しい場」であることが印象付けられているように捉えられ、学生の幼児教育に対する意識や考えが浅くなりつつあるように感じる。実習の経験により「幼児教育は楽しい場である」と思い就職をするものの、就職後、リアリティショックに直面し、悔やむ姿がよく見受けられることがある。今後も引き続き実習からリアリティショックに至る流れの可能性は否定できない。上述の事項を踏まえ、学外実習での学び方等を検討し臨み方について考える。

学外実習に臨む学生にとって保育現場は気持ちの引き締まる思いをする場である。しかし気持ちをどれだけ張り詰めて臨んだとしても、数日で解きほぐされ緩和された雰囲気の中で実習を行っている。実習訪問をする教員は様々な心配を想定して実習園に向うが、特に心配無用の状況に直面する。例えば学生が実習で一番不安に思うピアノ実技は園行事等で弾かなくていい流れとなっている。ほとんどの学生が行事準備の手伝いとなっているケースも散見される。また、記録に関しても厳しく言われることもなく、学生が提出したら訂正がない状態で返却されていることもある。さらに、設定保育については、自分で設定内容を考えることよりも、担当教員が共に考えていただけるようで困ることはない。上述の状況から、実習先での緩和された雰囲気が理解できる。それ故、学生が実習を終えた直後、「楽しかった」と話すのは当然の結果であろう。実習を通して幼児教育を学ぶ学生にとって、保育現場の優しさは就職に向けての不安が取り除かれているようである。ただ、「子どもの命を預かる現場」としての危機管理・保育の質等について、幼児教育を深く学ばせたい養成校としては、学生からの学びの言葉を聞くことが少なくなったことは残念であり、将来の不安が生じるところだ。

さて、教職課程にコアカリキュラムが導入された昨今、保育者養成校である教育現場ではアクティブラーニングが導入されることが推奨されるようになった。本校においても、教育実習事前事後指導（幼稚園）では演習授業として、アクティブラーニングの方法による反転授業とディスカッションを活用し進めてきた。反転授業では、インプットとして、指導案作成、絵本、歌唱指導の選曲等個人で取り組むように進めている。学生個人が模擬保育のイメージトレーニングを行い、授業で発表をする。その後、アウトプットとして、それぞれの学生から感じたことや学んだこと等のディスカッションを行い、教員からの指導が入るように進めている。模擬保育後は振り返りとして、反省、振り返り、友達の意見・教員の意見を聞いての学びを記入させ、再度指導案を提出させている。この演習授業は、実際の幼稚園教育実習に役立つことを想定して進めている。

しかし、この演習授業が実際の現場で一つの手立てとして、活用されずにいることが学生からの実習報告で知り得た。大学としては演習授業を進めてきたことで、一つの自信として実習に臨んで欲しいという願いはあったが、実際に実習に臨む学生は「設定は、無理しなくてもいいよ」と優しく対応され、気を楽しめる実習となり、演習授業の成果は出ることではない状況のようである。この問題を解決するには、学生自らが進んで、実技等をするように進めていくことが一つの打開策であろうかと感じる。保育現場に実習に臨む学生の質の向上と意識改革をしていく必要性を感じる。そこで、学生の質の向上としてルーブリック評価を活用し、それを自己の意識改革の手立てとして進め、自己の評価尺度が見える化（学生自身の保育実習への振り返りリアルタイムに問題に気付き、改善をすること。以下「見える化」と示す）し、学生の幼児教育に対する意識の向上に努める。

II. 授業の現状

1. 演習授業としてアクティブラーニングを導入する

アクティブラーニングとは従来のような受動的な授業方式ではなく、学生自らが能動的に学習プロセスに参加する学習手法のことである。具体的には、グループディスカッションやグループワークなどを取り入れた授業を示す。アクティブラーニングで身につけられるのは「専門的な知識」だけではなく「主体的に学ぼうとする姿勢」である。

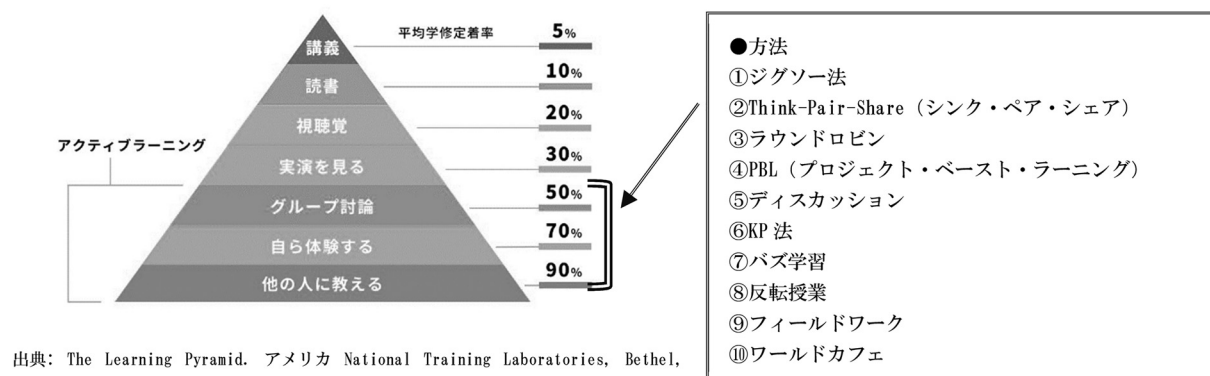


図1 ラーニングピラミッド

図1に示す「ラーニングピラミッド」によると、「グループ討論」「自ら体験する」「他の人に教える」が学修の定着率が高いと表示されている。このラーニングピラミッドについては様々な捉え方がある⁶⁾。本研究ではピラミッドの利点に注目し、思案する。ラーニングピラミッドに合わせて教育実習事前事後指導(幼稚園)の演習授業を検討し、シラバスを立て授業展開を行う(表1及び表2参照)。ラーニングピラミッドをインプット学習、アウトプット学習として考え、質の向上に向けて検討を図る。学生には教育実習事前事後指導(幼稚園)で幼稚園教諭一種免許を取得することを目的としていることを重要視する。教育実習を行う保育現場は子どもの命を預かる場であるため、専門的な基礎の部分は必須である。保育実習は特に子どもが小さいこともあり、命に関わる難しい実習である。そのことを意識させ、言葉で表現ができない子どもたちの声を聞き、理解をしていくことが重要である。その上で、インプット学習、アウトプット学習に臨む。インプット学習では、上述に示したように実習意識を向上するために、実習の規程を知り心構えをもつ。学外である保育現場での実習は、様々な場面にぶつかることが多く、その都度、保育者として感情のコントロールが必要である。また具体的に規程、書類の書き方等を含め、知り学び得る必要もある。授業を進めていくことで、たくさんの知識や情報に触れ、学生個人が興味・関心や知的な好奇心が喚起されると考える。また、その後の能動的であるアウトプット学習に繋がると捉える。アウトプット学習としても、新しい知識や情報を得て一人ひとりの考え方の幅を広げることができ、また、グループでのディスカッション等を行うことで、より深い学びになり能動的学習に繋がりがアクティブラーニングとしての授業体制が構築される。

一つの授業で、ラーニングピラミッド(図2参照)の上位層から下位層へ向けて、能動的であるアウトプット学習を展開することで学生の資質向上の一步に繋がる⁷⁾。またこの学習方法を繰り返すことで、保育技術も磨かれる。保育として同じ保育技術に取り組んだとしても、そこには、学生個々の考えや工夫が取り入れられるので、内容には違いが出てくる。それは学生の保育技術アップに繋がりが、保育技術の向上に邁進することができる。

表1 シラバス「教育実習事前事後指導」

(教育実習事前事後指導シラバス)

授業の 目標・概要	事前指導においては、幼稚園での実習の目的や意義及び実施方法を具体的に学ぶとともに、望ましい実習の準備や態度を系統的に養う。そして、主体的・効果的に実習を行うための基本知識の習得と心構えを養成する。事後指導においては、実習中に出会った諸問題について発表・討議することによって、今後の幼児教育の場での実践への理解を深めるとともに、実習における実習体験を省察することを通して、教師としての実践的知識を明確にする。
学習の 到達目標	<p>事前指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園での生活を理解し、実習における課題を発見する。 ・実習生としてふさわしい言動や倫理観を身につける。 <p>事後指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習生としての課題を振り返り、実践の場に立つにあたっての課題を確認する。 ・教職実践演習における個々の目標を設定する。
授業方法・ 形式	<p>○実習の事前指導</p> <p>教育実習の意義・目標・方法及び実習の準備・心得を通して、実習における各自の課題などを設定する。実習生全員で「実習の手引き」をもとに、講義形式で学ぶ。そして指導案を実際に作成し、それをもとに模擬保育を行って相互評価をする。実習直前指導として、全体の諸注意を行う。</p> <p>○実習の事後指導</p> <p>実習後の指導は、実習体験を振り返り、実習中に出会った問題や課題について、記録をまとめる。これを通して実践への理解を深め、実習体験の省察を通して、自己の課題を確認する。さらに担当教員と個別面談を行い、それをもとに4年次後期の教職実践演習における個々の目標を設定する。</p>
授業計画	<p>第1回 【事前指導】教育実習の意義と目的と幼稚園教育についての理解</p> <p>第2回 【事前指導】教育実習の目標設定と自己の課題を分析、教育実習の段階的な計画の理解</p> <p>第3回 【事前指導】実習全体の心構えと流れの把握(「実習の手引き」使用)</p> <p>第4回 【事前指導】実習日誌の目的と実習の注意点(「実習の手引き」「実習ノート」使用)</p> <p>第5回 【事前指導】実習日誌の具体的な記入方法(「実習ノート」使用)</p> <p>第6回 【事前指導】指導案の立て方と書き方の手順</p> <p>第7回 【事前指導】指導案の作成(部分実習)</p> <p>第8回 【事前指導】指導案の作成(全日実習)</p> <p>第9回 【事前指導】模擬保育の実施と評価(1)</p> <p>第10回 【事前指導】模擬保育の実施と評価(2)</p> <p>第11回 【事前指導】実習直前指導オリエンテーション、実習関連書類の作成と諸注意</p> <p>第12回 【事後指導】教育実習のお礼状作成と実習報告書の作成</p> <p>第13回 【事後指導】実習の振り返りと報告会 実習経験と今後の課題発表と討議①</p> <p>第14回 【事後指導】実習の振り返りと報告会 実習経験と今後の課題発表と討議②</p> <p>第15回 【事後指導】個別面談に向けての自己の課題の整理と総括</p>

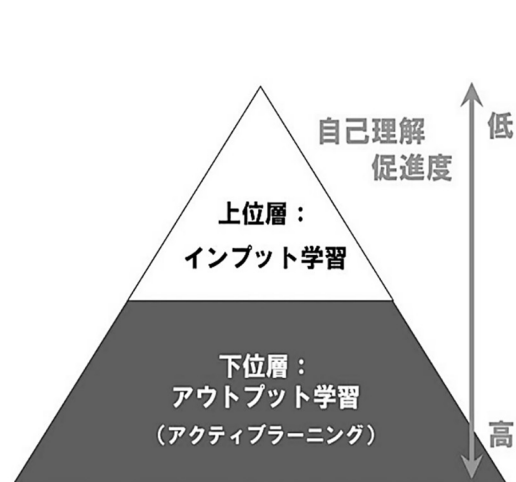
※毎時間ピアノと歌唱指導をするように進めている。それぞれの学生に必ず演習を取り入れるようにしている。

表2 授業案の組み立て

(演習授業の組み立て)

時間	学生の活動	教員指導
10分	<ul style="list-style-type: none"> ・本日の授業の流れと目的を理解する。 ・わからない事に関しては、質問をして説明を受ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本日の予定確認をする。 ・配布プリントの説明、専門的内容について具体的に説明をする。 ・質疑応答を受ける。
70分	<ul style="list-style-type: none"> ・模擬保育をする。4人～5人 絵本の読み聞かせ、手遊び、歌唱指導等を行う。 資料として、指導案、歌唱指導資料等を準備し、配布する。 ・グループディスカッションとして、模擬保育をした学生は反省考察を行う。その後参加した学生から学びや感じた事等を話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・模擬保育の様子を確認する。 ・それぞれの模擬保育に対しての、良い点と今後の参考になるように事例等を踏まえ、指導を入れる。
10分	<ul style="list-style-type: none"> ・本日の振り返りと、学びを記録する。 ・次週の予定の確認をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・次週の予定を伝え、個々の記録の確認を行う。

※指導案の書き方、模擬保育の相談等は授業以外の時間も対応するように務め、学生の納得いく模擬保育となるように進める。



・インプット学習

教育実習事前事後指導では、模擬保育を行う際に指導案、絵本、歌唱指導の曲の選曲、資料作成をする。指導案については事前に担当教員が添削を行い、清書で模擬保育に臨む。模擬保育内容をイメージトレーニングに進めているが、保育現場での実習経験がないため、意識としては高くもつことが難しい。しかし、実習規程を知り理解し、実習に対する意識が向上し、学生個人が心構えを持つようになる。

・アウトプット学習

模擬保育を行い、グループディスカッションをする。それぞれが、問題意識や、学びについてまとめて発言できるように進める。しかし、模擬保育に対する意識はまだ低く、感想だけの発言が多い。教員側で指導として助言を入れるように進めている。授業の姿勢が受け身になっているため、自ら進んで発言できるように、それぞれの学生が考える時間も持つように努める。

図2 ラーニングピラミッド¹⁾

2. 自己理解のためのルーブリック評価

ルーブリックとは、学習の到達度の評価基準を観点と尺度からなる表で示したものである。

自己理解、自己意識を高めるため、ルーブリック評価を活用する。学生自らが主体的に教育実習に取り組むことを目的に考える。ルーブリック評価を見える化にすることにより意識改革を目指すことにする。

学生が何を学習するのかを示す評価規準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準をマトリクス形式で示す評価指標である³⁾。これを大学独自で作成を行い、実習事前指導、実習中、実習事後指導として3項目

をあげ、評価基準を5段階に設定する。それぞれの状況に合わせて、学生たちにルーブリック評価を行い、幼稚園教育実習への意識と、目標を明確化していく。

効果として、ルーブリック評価を基に、自己の評価尺度が見える化にすることで、段階的に個人レベルによる意識の変容に着目することができるように考える。また、実践へのスキルアップに繋がるように、ルーブリック評価との整合性を図り、学修の到達度を測る。幼稚園教育実習指導では、ルーブリック評価を活用し、学生自らが学ぶ「主体性」、自らが考え工夫、検討をする「思考力・判断力」に焦点をあて、自己意識を持ち、実習に取り組むようになることを目的として進める。

3. ルーブリック作成について

ルーブリックの作成は以下の手順で行う。

学生自身が質の高い保育者像を一層意識して学びを深めていくことができるように、学生自身が自分で評価できる課題を事前に教員間で議論し検討をする。具体的には学生が自分自身を省察できるように、内容を検討する。評価の段階により、自己評価を“見える化”できるようにする⁸⁾。

- (1) 幼稚園関係のルーブリックに関する論文分析を行う。
- (2) (1)の分析の上で、本学での幼稚園実習を通して学生に目指してほしい方向性について議論し合い、ルーブリックの項目について検討する。そして本学の学生が評価できる内容でルーブリック評価の表の作成を行う(表3参照)。
- (3) ルーブリック評価内容について、再度案出をする。
- (4) ルーブリック評価を活用し、学生に実習直前にルーブリック評価(実習事前)の実践をする。
- (5) 実習直前・実習中のルーブリック評価は、アクティブアカデミーで知らせ、期日を決めGoogleフォームで提出させる。
- (6) 学生が提出したデータをまとめる。(実習直前・実習中)
- (7) 実習事後ルーブリック評価を授業内で行う。
- (8) 学生が提出した全てのデータをまとめる。(実習事後)
- (9) 実習園からの評価とルーブリック評価の整合性を確認する。
- (10) 学生面談を行いそれぞれに結果を反映し、これからの思い等含め学生意識の変容をまとめる。

III. 本稿の目的

本研究では学生の質の向上のために大学独自でルーブリック評価の作成を行う。ルーブリックは、一般的に縦軸が「観点」、横軸が「段階」とされ、観点ごとに段階が一目でわかるように作成された評価基準表の形式である。幼稚園実習としてのルーブリック評価を参考に進める。項目は実習事前・実習中・実習事後の3通りで進める。評価基準は5段階で行う。

1. 調査対象

2022年度に幼稚園実習に行く大学3年次生・4年次生23名を対象とする。

2. 調査期間

幼稚園実習の直前(6月頃)、実習中(9月中旬頃)、実習後(10月頃)

表3 ルーブリック評価

(幼稚園教育実習ルーブリック)

評価観点		評価基準				
		5	4	3	2	1
実習事前指導	授業態度 (実習に必要な書類作成等)	時間的にかなり余裕を持って計画を立てて進めた。理解できないことはまず自分で調べてみて、分からなければ担当教員に質問等を行い理解して進めるように努めた	時間的に余裕を持って計画を立てて進めた。書類等できないところは空欄にしておき、担当教員に聞くようにした。	担当教員の指示通りに授業、書類等期日を守り行った。わからないところは質問した。	授業等で提出物があれば、期限までに出すようにした。担当教員からうながされると発言はするが、自ら積極的に発言することはない。	授業では話を聞くが、その場では提出等は行っていない。先生に期限遅れの指摘を受けて提出した。
	模擬保育・指導案	自分で立てた計画案に、事前に担当教員から繰り返し助言を受け、さらに実践・省察して、自らの計画案を練り直した。	自分で立てた指導案に、担当教員からの助言を受けてさらに工夫を試みた。	参考になる本から、自分なりに改変をして指導案を作成した。	参考になる本をそのまま写して指導案を作成した。	計画を立てることができなかった。参考になる本などを見つけたが実践しなかった。
	課題 (課題曲ピアノ・名札作成等)	課された課題以上のことに主体的に取り組み、全てを到達することができた。	課題にすべて取り組むことはしており、ある一定のところまでは到達できた。	課題にすべて取り組むことはしているが、できないところがある。	課題に取り組んでいるものと、取り組むことができていないものがある。	課題がほとんどできていない。
実習中	事前準備 (教材研究)	事前に、保育準備を教員等に相談しながら進めることができた。	教員に相談をしたが、十分に時間がなく、準備に不安が生じた。	教員に相談をしたが、理解できずに実習を進めた。	教員に相談をせず、参考書を見て準備を行った。	教員に相談をせず、参考書も見ずに、友達に聞きながら準備を行った。
	態度	子どもの気持ち・考えを優先に受け止めたり、見守りをしたりした。	子どもの年齢、その日の状態を見て判断して子どもと関わった。	子どもの発達年齢を把握し、臨機応変に関わるようにした。	子どもに積極的に話しかけコミュニケーションを取るようになった。	自分から話しかけず、子どもから話しかけてきたら関わるようにした。
	省察	自らの行動が子どもにどれだけの影響を与えるかを考え、注意を払いながら関わり方を見つけ取組んだ。	自らの行動が子どもにどれだけの影響を与えるかを考え、注意をしながら関わった。	子どもに関わりながら、自らの振る舞いや言動に注意を払いその都度行動を変えた。	子どもとの関わり後に自らの振る舞いや言動に注意を払うことがあった。	実習記録に反省・振り返りとして記入した。
	実習記録	確認していただいた後、自分なりに振り返り、省察し、訂正を行った。指摘を受けた内容で理解できない時は質問をして、記録に書き加えた。	自分なりにその日の記録を記入した。質問したいことは考察に記入した。確認していただいた後の訂正は自分で行い、書き直した。	その日の記録を記入した。その日の感想等を記入した。確認していただいた後の訂正は、付箋をつけたままにして、最終提出に間に合うように訂正をした。	その日の記録は毎日記入するようになった。しかし、どう書けばいいのか悩み、途中で止まることが多く、時間がかかった。提出が1回遅れた。	記録の書き方がわからず、調べながら書いていると、とても時間がかかった。提出が遅れることが度々あった。
実習事後指導	振り返り	実習先の取組みのねらいを理解した上で、保育者と共に実践し、得られた学びをまとめることができた。	実習先で保育者と共に実践し、得られた学びをまとめることができた。	実習先で保育者の実践から得られた学びをまとめることができた。	実習先で保育者の実践から得られた学びをまとめたが、まとめ方が不十分であると感じた。	実習先での学びをまとめることができなかった。
	成果及び課題	実習後、授業で紹介された教材等を見直し、また自ら本やSNS等で調べ、先輩の意見を参考に教材研究を行った。さらに、実習先の保育者の教材も参考にした。	実習後、授業で紹介された教材等を見直し、また自ら本やSNS等で調べ、先輩の意見を参考に教材研究を行った。	実習後、授業で紹介された教材等を見直し、また自ら本やSNS等で調べて教材研究を行った。	実習後、授業で紹介された教材等を見直した。	実習後、特に何もしなかった。
	実習自己評価	指導・助言に頼らず、自分自身で実習の成果と課題を正確に認識することができた。または指導・助言を受けた内容と自分自身で認識した実習の成果と課題が完全に一致していた。	指導・助言を得て、実習の成果と課題を正確に認識することができた。	指導・助言を得て、実習の成果と課題を認識することができた。	指導・助言を得たが、実習成果と課題の認識が不十分であった。	指導・助言を得たが、実習の成果と課題を認識しなかった。

参考資料 大阪教育大学学校実習科目ルーブリック
四国大学 保育実習ルーブリック⁹⁾

IV. ルーブリック評価の結果

実習直前、実習中、実習後と3回行った。以下に示すグラフは実習直前のルーブリック評価である。

1. 実習事前指導

図3に示す自己評価では「4」「3」がどの項目においても多くを占めている。これは授業に真面目に取り組んでいることがグラフよりわかる。学外実習を意識していたことが推測できる。また、グラフの傾向として、ほとんどが「3」以上の自己評価であるため、授業態度・模擬保育・課題を自分なりに取り組んできたという意識が高い。一方、課題において、「1」「2」の自己評価が他の項目と比べて多いが、これはピアノ課題ができないことが読み取れる。

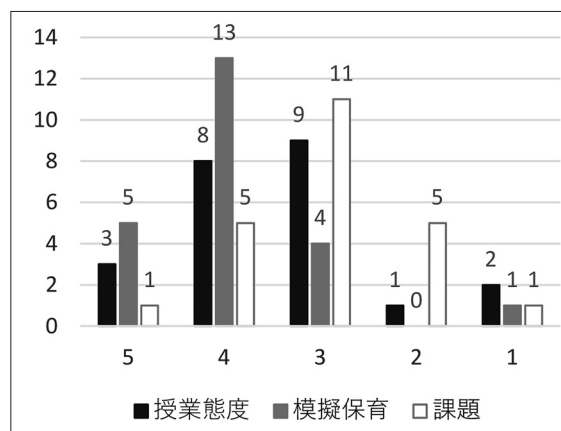


図3 実習事前指導のルーブリック評価

2. 実習中

図4に示したのは実習中のルーブリック評価である。自己評価による教材研究・実習態度については「5」が大半を占めている。それだけ、真剣に実習に取り組んでいることがわかる。実習記録については「4」の「確認していただいた後、自分なりに振り返り、省察し、訂正を行った。指摘を受けた内容で理解できない時は質問をして、記録に書き加えた。」の結果が多い。項目は難易度の高い内容ではあるが、「できている」という自己評価からは、意識して取り組んでいるのであろうと捉える。

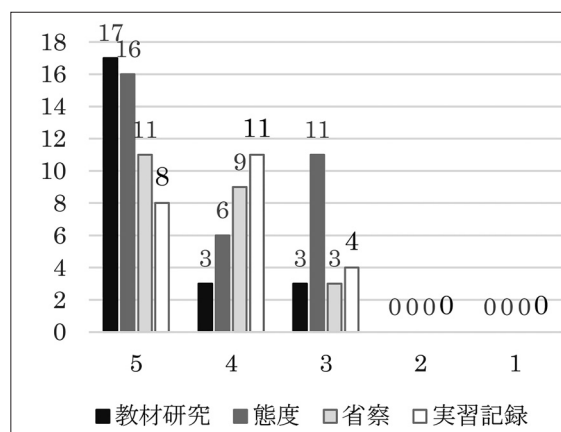


図4 実習中のルーブリック評価

3. 実習事後指導

図5では特に実習自己評価に関する評価分布に注目する。当初の想定では、実習自己評価で「4」以上と自己評価することは難しいと考えていたが、実習自己評価「4」が14名、「5」が3名いた。実習自己評価「5」の項目には「指導・助言に頼らず、自分自身で実習の成果と課題を正確に認識することができた。または指導・助言を受けた内容と自分自身で認識した実習の成果と課題が完全に一致していた。」とあり、この内容も図4と同様に難易度が高い内容である。演習授業で模擬保育を行い、自己の振り返りも含め、他の学生の意見を取り入れたり教員の意見を取り入れたりしてきたことの結果であろうと考えられる。ただ、実習園の評価と実際に一致するのか懸念する。

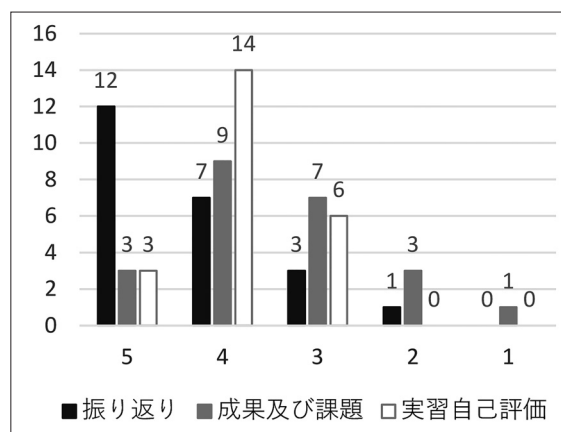


図5 実習事後のルーブリック評価

V. 省察、今後の課題

ルーブリック開発及び学生によるルーブリックの自己評価結果を受けて、以下3点を述べる。

第1に、ルーブリック開発の意義について述べる。以前までの実習評価は、個々の外部の成績と教員が見た学生の授業態度、課題提出等で確認を行ってきた。学外からの評価については学生個人と面談を行い、実際の評価と学生からの聞き取りにより実習姿勢を確認して評価をする。この評価は実習先の園と実習に取り組んだ学生の視点が異なるため、教員側で評価表コメントの確認を行い判断し、学生に成績としてフィードバックしている。学生からの自己評価としては「頑張った」「設定保育はできた」と思うところがあるため、その点について園側の評価と相違があり、評価に対して不満の募る学生もいた。今年度はルーブリック評価で自己の評価の“見える化”に努め、実習事前・実習中・実習事後と3回に渡りアンケートの形で調査を行い、結果と共にフィードバックをすることにした。また、学生の幼稚園教育実習への意識と実践に対する学外での評価を照らし合わせ、評価の下で個々の学生意識改革を行う試みも行った。このルーブリック評価は、自己評価だけではなく学外からの評価と照らし合わせフィードバックを行うことで、両面から実習評価へのより高度な省察が可能になる。本研究の取り組みにより、実習に対する意識改革ができたことが、本研究の意義として挙げられる。

第2に、ルーブリック評価結果により示唆されることについて述べる。ルーブリック評価は、実習事前に行ってきた授業成果の表われと捉えられる。授業で設定保育を行う前日と当日は何度も繰り返しイメージトレーニングを行い練習に取り組んでいた。設定保育に向けて努力する姿は学生の主体的、かつ能動的に取り組む姿勢であろう。模擬保育内での資料等については、学生自身が各自保管し実習資料として活用していた。これは学生の幼稚園教育実習に対する意識の向上とも捉えることができる。一方、ルーブリック評価を通して、保育現場の厳しさを感じることなく優しく対応される実習で終わっているということが読み取れる。今回の学生のルーブリック評価の結果は「5」「4」の評価が多く非常に自己評価は高かった。つまり、自己評価による「5」「4」は、“実習が楽しい”、すなわち“私はできている”と評価する学生もいるという読み取りも可能である。本研究結果については今後の課題である。また、学生の能力の伸長が、幼稚園教育実習の状況により自己満足で留まることを懸念する。実習後に「就職は考えてますか」「保育補助のアルバイトに来られませんか」と声をかけられている学生も多い。実習訪問をする教員にも声がかかる状況もあった。保育者不足問題の解決のためであろうと思われる。学生は、これから社会に出るためのステップとして現場での実習に臨むが、保育者不足の問題が背景にあることで、未熟な学生に自信をもたせる結果に至ることが危惧される。学生の实習に対する意識向上について検討が必要である。

第3に、ルーブリック評価内容に関する今後の課題について述べる。学生が理解できる内容を検討し表記したが、漠然とした文面に捉えている可能性もある。そのため深く受け止めずルーブリック評価を行っているようにも捉えられる。内容を深く理解できるように、幼稚園教育実習事前事後指導内で具体的に説明を入れ、記入例のフォーマット等を作成し学生自身の自己評価方法の改善に努めたい。

幼稚園教育実習段階では、学生がスキルアップできる保育の資質能力はまだスタートの段階であり、保育のファーストステップである。多くのステップを重ね、個々の保育力の向上を今後もサポートして取り組む。また、学生の自己意識を向上することができるように、自身における保育の資質能力の状況把握を理解し、さらなるスキルアップに取り組むように進めたいと考える。

引用文献

- 1) 國田祥子・小阪美由美・西菜見子 (2019). 保育士の離職意思と職場環境の関係 中国学園大学紀要, 18, 113-122.

- 2) 厚生労働省 (2018). 保育所保育指針 フレーベル館
- 3) 文部科学省 (2011). 中央教育審議会大学教育部会 (第8回) 配付資料5 Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/attach/1314260.htm (2022年10月9日閲覧)
- 4) 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
- 5) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018). 幼保連携型認定こども園教育保育要領解説 フレーベル館
- 6) 土屋耕治 (2018). ラーニングピラミッドの誤謬ーモデルの変遷と“神話”の終焉へ向けてー 南山大学人間関係研究センター紀要, 17, 55-73
- 7) 島本好平 (2021). ラーニングピラミッドとは | 文部科学省が進める新たな教育の理論モデル Retrieved from <https://goalsettinglab.net/learning-pyramid/> (2022年10月9日閲覧)
- 8) 加藤由美・安藤美華代 (2021). 若手保育者の離職防止に向けてー園長を対象とした質問紙調査からー 保育学研究, 59, 117-130.
- 9) 加藤孝士・富田喜代子・原田美代子・兼間和美・湯地由美・山本健志郎・奥村英樹 (2017). ルーブリックによる実習評価と実習後の振り返りの関係ールーブリックの回答順に着目してー 四国大学紀要, 49, 23-35.

参考文献

- 1) ダネル スティーブンス・アントニア レビ 佐藤浩章・井上敏憲・俣野秀典 (訳) (2014). 大学教員のためのルーブリック評価入門 玉川大学出版部
- 2) 藤本明美 (2019). 「保育・教職実践演習」において保育学生が主体的・対話的に保育観を省察する授業デザイン 神戸教育短期大学教育実践研究紀要, 1, 19-29.
- 3) 古屋祥子・田中謙 (2018). 保育者の資質向上におけるアクティブラーニング型授業での「プレイルーム」マネジメントを通じた保育実践力の育成 山梨県立大学紀要, 13, 47-61.
- 4) 平澤一郎 (2017). 教育・保育実習指導におけるルーブリックの活用 豊岡短期大学論集, 14, 545-554.
- 5) 半直哉・正長清志・竹野博信・西本裕子・水鶏口陽・宮下小百合 (2020). ルーブリックの活用による保育実践力の向上についてー学校行事をとおしての取り組みからー 岩国短期大学紀要, 48, 1-14.
- 6) 中嶋一恵・浦川末子・白石景一・下釜綾子・永野司・中村浩美・中島健一郎・滝川由香里・本村弥寿子 (2014). ルーブリックを使用した学外実習評価基準の作成について 長崎女子短期大学紀要, 38, 102-107.
- 7) 尾寄司・中村教子 (2017). 現場連携による実習評価ルーブリックの開発 (I) ～保育所実習のルーブリック作成に関する予備的考察～ 東京家政大学研究紀要, 57, 31-41.
- 8) 新保友恵 (2019). 保育士が働き続けやすい保育施設の職場環境と組織作りに関する研究 21世紀社会デザイン研究, 18, 73-91.
- 9) 和田明人・君島昌志・青木一則・米山珠里・日野さくら (2013). 保育者養成におけるアクティブラーニング 東北福祉大学研究紀要, 37, 57-71.
- 10) 山内陽弘 (2013). 教育評価におけるルーブリック作成のためのいくつかのヒントの提案ーパフォーマンス評価とポートフォリオ評価に着目してー 群馬大学教育学部紀要, 62, 157-168.